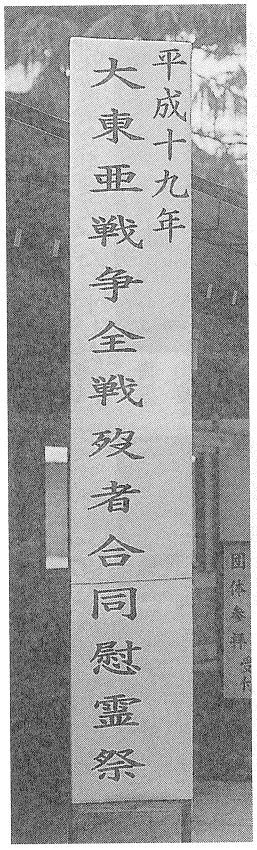


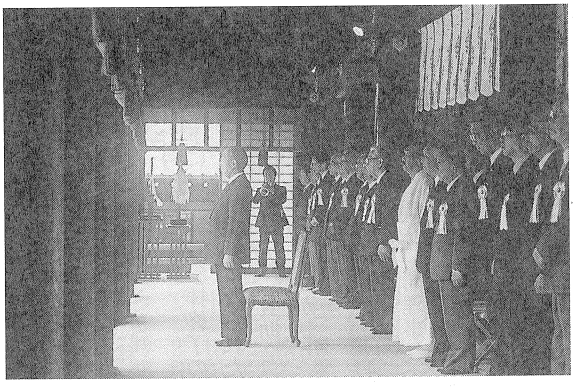
平成19年7月7日（土）正午より、靖國神社において、表記の合同慰霊祭が、当協議会名誉総裁三笠宮崇仁親王殿下の御臨席を仰ぎ、御来賓、参加各団体代表、賛助会員等約１８０名が参集して、厳粛かつ盛大に齋行された。

この日は梅雨の晴れ間、薄曇りながら爽やかな緑の風が吹き渡る拝殿に、一同参列し、起立してお迎えする中、三笠宮殿下におかれては、神官の先導により拝殿中央の御座席に着座された。卒寿を超えてなお矍鑠たる殿下の御英姿を仰ぎ、一同心引き締まる中、式典は開始された。

トランペットの伴奏により、全員起立して国歌を斉唱した後、神官による修祓の儀、献饌の儀、祝詞奏上と神儀が続き、次いで会長の祭文（別掲）奏上となったが、この日、瀬島龍三会長には、体調不良のためやむなく欠席されたので、新庄鷹義副会長が会長祭文を代奏した。

次いで、奉納演奏は、世田谷コールエーデ合唱団による「小さな木の実」「千の風になって」「赤とんぼ」の三曲が合唱された後、一同起立し、トランペットの伴奏により「海ゆかば」を斉唱した。合唱並びに斉唱の声は神苑に谺し、英霊もさぞやお喜びの上、共に声を合わされたことであろう。

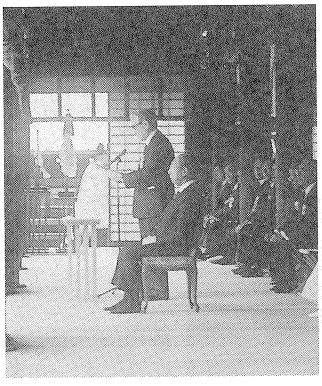
終わって、殿下を始め参列者一同、本殿に昇殿して参拝し、英霊奉慰の誠を捧げた。


国歌斉唱　（三笠宮殿下と共に）

祭　文

本日、ここに、三笠宮崇仁親王殿下の御臨席を仰ぎ、平成十九年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭を挙行するに当たり、謹んで全戦没者の御霊の御前に、慰霊の言葉を申し述べます。

過ぐる大東亜戦争におきましては、多くの方々が、同胞の安泰を願い、祖国の安寧を願って、苛烈悲惨な戦場に赴き、辺境の地において、故国に残した家族を思い、妻子の安否を気遣いな


祭文奏上（新庄副会長代奏）

慰霊

題字揮毫・瀬島龍三氏

第７号

財団法人　大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

〒105-0001　港区虎ノ門3-6-8
第６森ビル５階

電　話　03（5405）1838
ＦＡＸ　03（5405）1839

http://homepage2.nifty.com/ireikyou

振替口座　00140-6-334930

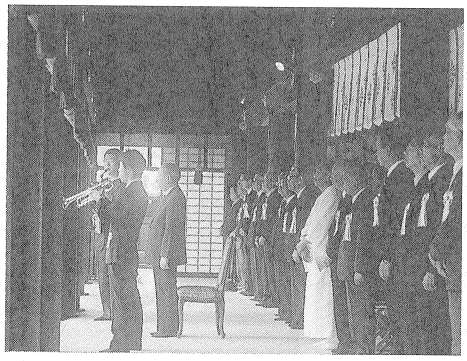
編集人　飯田正能
発行人　柚木文夫
印刷所　ヨシダ印刷株式会社

目　次

大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭 …… 1
母宮貞明皇后とその時代
―三笠宮両殿下が語る思い出― …… 3
8月15日・靖國の社頭に思う …… 6
今、何を語らん …… 9
協議会参加団体の紹介⑥財団法人海原会 …… 13
巨星墜つ・瀬島隆三会長逝去 …… 15
事務局からの報告 …… 15
新入会員及び寄付者 …… 16

がらも、勇戦敢闘して戦場に散って逝かれました。その数、二百数十万人に及んでおります。今日、我が国国民は、豊かで平和な生活を享受しておりますが、この豊かで平和な生活は、これらの戦場に散って逝かれた、多くの方々の犠牲の上に築かれたものであることを、私どもは決して忘れることは出来ません。

しかしながら今日、平和と繁栄が続く長い歳月の経過の中に、いつしか、戦没者に対する慰霊の心が風化しつつあることが憂慮されるところであります。ここにおいて私どもは、戦没者慰霊事業の永続を図るため、戦没者慰霊諸団体と相諮り大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会を設立いたしました。



「海ゆかば」斉唱
（三笠宮殿下と共に）

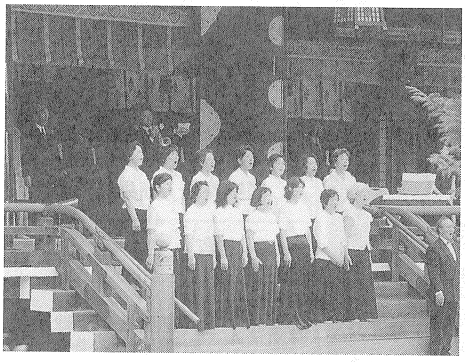
設立後二年を経過した今日、参加団体は十七団体を数え、本日のこの合同慰霊祭は、これら諸団体と共に催行する運びとなったものであります。

私ども協議会は、今後とも慰霊団体協力の輪を広げ、戦没者の慰霊顕彰と追悼事業の永続を図るため、全力を傾注して参る所存であります。

ここに、協議会参加諸団体と共に、在天の御霊の安らかならんことをお祈り申し上げますとともに、どうか私どもに、なお一層の御加護とお導きを賜りますようお願い申し上げます。

平成十九年七月七日

財団法人大東亜戦争全戦没者
慰霊団体協議会
会長　瀬島　龍三



「海ゆかば」斉唱（三笠宮殿下と共に）
（世田谷コールエーデ合唱団）

直　会

式典を終わり、13時30分から、会場を靖國会館２階「偕行の間」に移して直会が催行された。

三笠宮殿下には、昇殿参拝終了の後、13時頃靖國神社を御退社になられたが、御来賓、参加団体各代表、賛助会員等約１３０名が参集して直会が執り行われた。

直会はまず、当協議会柚木文夫理事長の開会の辞に始まり、同理事長の司会によって進められた。当協議会を代表して新庄鷹義副会長が、本日の合同慰霊祭式典が、滞りなく、厳粛かつ盛会裡に終了したこと、齋行に当たり、参加各団体代表者等から受けた絶大なる御支援・御協力に厚く感謝の意を表するとともに、今後とも、慰霊事業の永続を図るため、一層の御支援を賜りたい旨の挨拶を行った後、御来賓を代表して靖國神社の南部利昭宮司が挨拶をされた。

新庄鷹義副会長挨拶

南部宮司は、6月7日、来日中の李登輝台湾前総統が、靖國神社に参拝されたが、神式に則った正式の昇殿参拝であった。同氏の実兄は、当神社の御祭人であるが、62年の歳月を経て、ようやく英霊として祀られている兄上の御霊に会うことができたと目を潤ませ、立派に手厚く祀られていることへの感謝の意を表された旨報告された。また、靖國神社崇敬奉賛会は、会員の高齢化に伴い減少傾向にあるが、一方最近は、

南部利昭靖國神社宮司挨拶

若い方々の加入が増え、同奉賛会青年部「あさなぎ」では、各種勉強会、見学会等を実施したり、各種の奉仕活動に積極的に参加する等活動の輪を拡げつつあることは、誠に心強く感ずる次第である。慰霊団体協議会並びに参加諸団体代表者を始め、御参列の皆様の一層の御健勝と御活躍を心より祈念申し上げる旨述べられた。

次いで御来賓の紹介があり、御来賓を代表して「新生つばさ会」の杉山蕃会長の御発声により、一同靖國の御霊に献杯した後、懇談会食に移った。

和やかな雰囲気の下に、懇談会食は約1時間に及び、司会者の閉会の辞とともに、一同来年の催行を期して解散した。誠に心洗われる思いの合同慰霊祭であった。

献杯（世田谷コールエーデ合唱団）

母宮貞明皇后とその時代
―三笠宮両殿下が語る思い出―

本年度合同慰霊祭催行直後の7月10日に「母宮貞明皇后とその時代―三笠宮両殿下が語る思い出」と題する、ノンフィクション作家工藤美代子著、中央公論新社発行の書籍が刊行された。まえがきに「本書の執筆は大正天皇のお后、貞明皇后の御遺徳を偲びつつ、現代における皇室と国民とのより良きあり方を考え直すよすがとなればと思いたって開始された。快くインタヴューに応じてくださった三笠宮崇仁親王殿下、百合子妃殿下のお二人には貴重な時間を割いていただき、歴史に残る多くの興味深い逸話をお話しいただくことができた。・・・取材は平成18年9月に始まり平成19年3月まで、2月を除く毎月1回、約2時間から2時間半ずつ計6回行われた。両殿下は几帳面に、ご丁寧に、時にユーモアを交えられて質問にお答えくださった。

平成18年12月には満91歳のお誕生日をお迎えになった三笠宮殿下だが、各種の洋舞、日舞で鍛えられたためか背筋をきりっと伸ばされ、声量豊かに話されるご様子はとてもご年齢には思えないお若さであった。妃殿下のお髪の豊かな輝きやお姿のお美しさは言うに及ばない。・・・昭和天皇、秩父宮、高松宮の弟宮であられ、貞明皇后が生きてこられた時代の唯一の証人である三笠宮殿下、百合子妃殿下によって語られた思い出がここに上梓されることは、歴史の事実を後世に伝えるためにも重要なことと思われる。・・・」とあるように、貞明皇后は、そのご生涯を通して、日本の激動の時代、その大半を国難と対峙しながら過ごされ、常に国家と国民の行く末を案じられていた。本書は、そうした皇室と国民の在り方の良き姿・実相を示す好著である。その目次を拾い出すと、次のとおりである。

第一章　澄宮ご誕生から大正天皇崩御まで―「三笠宮双子説」の真偽
第二章　開戦前夜、三笠宮と百合子妃の婚儀―陸士から陸大へ
第三章　毅然たる貞明皇后の宮中生活―御親蚕と福祉の日々
第四章　「若杉参謀」南京へ赴任す―対華新方針
第五章　死なばもろとも―火災の中

カバー写真
表・秩父宮邸ご訪問（前列左から勢津子妃殿下、貞明皇后、喜久子妃殿下、後列左から、秩父宮、高松宮、三笠宮の各殿下、昭和14年10月22日

の三笠宮邸
第六章　孤独で寂しかった昭和天皇
―緊張の終戦前夜
第七章　貞明皇后の生まれ変わり―
近衛甯子さんの「おばば様」
第八章　戦後の混乱と貞明皇后崩御
まで―勤労奉仕団への心配り

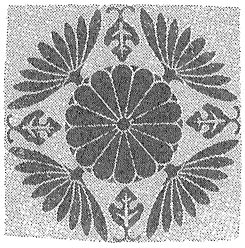
以上のうち、第四章と第六章は軍人としての三笠宮殿下のご活躍の事跡やお心の一端を表すものとして興味深いものがあり、改めて畏敬の念を深くするところである。

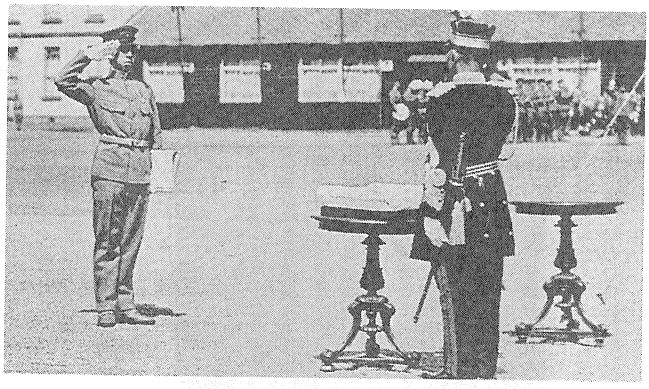
三笠宮殿下は、昭和18年1月（騎兵大尉・8月陸軍少佐）から昭和19年1月まで約1年間、支那派遣軍参謀として南京の総司令部に赴任された。その際秘匿名として、殿下の「お印」から取った「若杉参謀」を名乗られていた。たまたま政府の「対華新方針（1月9日付け「戦争完遂に付いての日華共同宣言並租界還附及治外法権撤廃等に関する日華協定」）」が決定された直後であったので、その方針に従って作戦や戦闘行動、占領地の軍政を行うよう指導するため、派遣軍各部隊を視察された。そして、離任直前の昭和19年1月、支那派遣軍総司令部佐尉官に対して実施した研究会のための教育資料として殿下自らお書きになった原稿が「支那事変に対する日本人としての内省（幕僚用）」と題する文書である。この文書が、50年ぶりに神戸大学須崎慎一教授によって発見され（国立国会図書館憲政資料室保管の阿部信行陸軍大将関係文書のマイクロ・フィルム中にあった）、読売新聞の月刊誌「THIS IS 読売」（平成6年8月1日発行、戦後50年特大号）の特集記事「闇に葬られた皇室の軍部批判『支那事変に対する日本人としての内省』参謀・三笠宮の危険文書」というタイトルで、「殿下に独占インタビュー」の記事と共に発表されて大きな反響を呼んだ。

「支那事変に対する日本人としての内省（幕僚用）」と題する文書は、当時の支那派遣軍総司令部で行われた研究会（佐尉官教育）用の講義レジュメのようなものであるが、その内容を一読して、殿下の支那事変の解決、延ては大東亜戦争の目的完遂に向けての並々ならぬ御決意と、崇高な御見識、中国民衆にまで及ぶ御慈愛心に、今更ながら感動を覚えるのである。

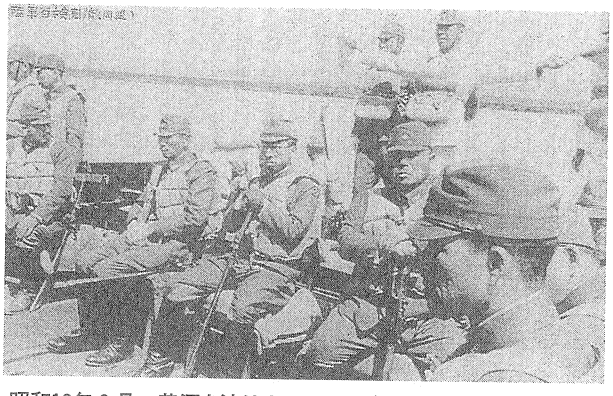
文書の内容は、第一研究から第三研究まで三部構成になっており、更に付録として「綿鉄集（政略之部）」と題する、中国人に接する日本人として心得べき、基礎的で重要な事項が記された文書があり、中国人は「水」で、日本は「鉄」と比喩されている。今に通ずる優れた御見識である。

この研究会の教育目的は、「陸軍軍人の「内省」と「自粛」を促すと共に、支那事変に対する認識の統一を図るに在り」とされており、「大東亜決戦下、時局は極めて重大であるにも拘わらず、支那事変は、既に足掛け八年間に亘り


三笠宮家の紋章


昭和９年３月、陸軍士官学校御卒業（48期）の殿下

昭和14年、騎兵中尉時代の殿下


昭和18年８月、黄河を渡りオルドス・デルタの視察をされる殿下

継続し、今尚解決近きにありと判定し能わざるは、誠に遺憾の極である。・・・支那派遣軍将兵一同が、従来より良く事変の本質を認識し、公平無私の態度を以て冷静に事態を観察し、自粛自戒、適切なる大局的大乗的着眼の下に、事変解決に熱誠以て奮励しありや否やを静かに反省するときに、自分は「あり」と断定する勇気を生じないのである。・・・諸官はこれを契機として自ら悩み、自ら苦しみ、以て透徹した「悟」を自ら啓かなければならない。」と自省を込めて、真剣に呼び掛けておられる。

そして、第一研究では「一　満洲事変の出兵目的如何。二　支那事変の出兵目的如何。」という研究課題を、第二研究では「一　何故支那事変は未だに解決せざるや。二　所謂対華新方針の最も有難き点は何処に在りや。」という研究課題を、それぞれ予め出してこれに対する解答を求め、問答式に研究を進め、殿下のお考えを率直に披瀝し、対華新方針の意図するところを簡明に述べられ、日本人としての反省を促しておられる。更に第三研究では、「大東亜戦争の現段階に於て支那派遣軍としては其の戦争目的を何に置くを至当とするや。」という研究課題について、問答式を止めて、殿下自らのお考えを、精神面、施策面等色々の角度から述べられており、「是に於て自分は大東亜戦争の現段階に於て、支那派遣軍の戦争目的を「速やかに中国四億の老百姓に安居楽業を与え、以て近代的に統一せる中華民国を完成す」ることに置きたいと考える。而もこれこそ此の詔勅に拝する「苟モ民ニ利有ラバ何ンゾ聖造ニ妨ハム」である。・・・即ち吾人の言う「治安」の良否とは、民衆特に農民が安居楽業し得るや否や、即ち民衆の眼と声とを以て判定しなければならないのである。・・・従来を振り返って「聖戦」とか「正義」とかよく叫ばれ、宣伝される時代程事実は逆に近い様な気がする。「実行は最大の宣伝なり」。・・・自分は諸官に提議する。平常は「日華」でもよろしい、然し中国人と話をするときだけでも「中日」ということを、孟子に曰く「大を以て小に事うる者は天を楽しむ者なり、小を以て大に事うる者は天を畏るる者なり、天を楽しむ者は天下を保ち、天を畏るる者は其の国を保つ」と。即ち最も実力ある者は最も謙譲なるべし、是が東洋王道の根本精神とも謂うべきである。中国の小を以て日本の大に事えたならば中国は安全であろうが、日本の大を以て中国の小に事えてこそ始めて東亜永遠の平和を確立せらるるのである。」と明言しておられる。正に卓見と言うべきである。

更に付録の「綿鉄集（政略の部）」では、前出のように、中国人に接する日本人としての心得うべき事柄のうちで、重要と考えられる基礎的事項が挙げられているが、「さらにこれを基礎として、深く深く、中国の地理（気象）、歴史及び、これにより、数千年の長きに培われてきた中国人独特の性格、風俗、習慣、言語等を探究体得されて、公私における中国人との付き合いに、過ちなからんことを期せられたい。」として、「一、日本と英米の対華政策の差異、二、日華経済提携の原則、三、「官」と「民」、四、中国に対する支援協力の骨、五、日本の対華政策の不安定性、六、病人と医者、七、政治家と事務家、八、中国向きの政治家、九、中国向けの宣伝、十、「引」と「押」」の10項目が掲げられているが、一の「中国人は「水」である。いかなる器物にも調和できる。米英人は「綿」である。肌触りは至極微温的で、いつ水中に入ったのかさえ気づかせない。そして綿は水から離れる時は、綿は一杯水を吸い込んでいる。日本は「鉄」である。水に対する威圧は異常なもので、絶対的な圧迫を感じせしめる。しかし鉄が水から離れた時に付着する水量は僅かに数滴にすぎない。」の例えや、八の「中国官僚社会の特性を了解し、その弱点短所を知悉しながら、しかもこれには深く触れず、「小事糊塗、大事不糊塗」即ち「重箱の隅をすりこぎで掃除する」くらいの風格を有し、中国人に親しまれる性質の者を配さなければならない。かくすれば事務的な指導等は自然と出来る。中国官僚の欠点ばかりに目を光らすことなく、例えば、イ、情誼的で人情を重んずる、ロ、面子を尊ぶ、ハ、政治的で常識に富む、ニ、和平的で官僚の臭味が少ない、ホ、理屈よりも実際的である、ヘ、みだりに他人の事に容喙しない、等の美点を探してこれを合作提携の道具としなくてはならない。」等の指導要領など優れた見解が盛られており、今もなお、外交政策上にも活かすべき心得が含まれているように思われる。

このような三笠宮殿下の優れた御見解、御見識が全く活かされず、箝口令がしかれ、殿下が内地へ御転任後は、軍当局から「危険文書」として没収・焼却処分されていたということは、時勢の流れとはいえ、誠に残念なことであり、一大痛恨事である。

（飯田正能記）

8月15日・靖國の社頭に思う

飯田　正能

昭和20年8月15日、浅間山麓、照り付ける太陽、青い空、白い雲、白樺林の蝉時雨。そして、悲憤、痛恨、血涙を押さえて玉音放送に身を震わせたあの日、あの時。あれから62年、今も変わらぬ心象風景である。

平成19年8月15日、今日も暑い。8時過ぎには既に30度を超えた。日中はまた、35度を超える猛暑となるであろう。見上げる大鳥居が青空に突き立つ巨人のように雄々しく思われる。

神域に入ると、さすがに凛とした森厳の気が漂う。黙々と社殿に向かう人波の中には、背中を丸めて行く高齢者の姿もある。黒の礼服に身を包んだ一行は、地方から上京した遺族の方々であろうか、娘に手を引かれて行く老母の姿もある。様々な思いを胸に秘め、懐かしい夫や父、愛しい息子達の御霊に会いに行くのであろうか。

この日靖國神社では、9時から英霊にこたえる会主催の「第32回全国戦没者慰霊大祭」が、引き続き10時30分から、参道の特設テントにおいて、英霊にこたえる会と日本会議の共催による「第21回戦没者追悼中央国民集会」が執り行われた。

慰霊大祭は、大拝殿に溢れる大勢の参列者の真摯な祈りの中に、定刻、拓殖大学吹奏楽部の伴奏による国歌斉唱に始まり、修祓、献饌、祝詞奏上の神儀に続いて堀江正夫会長（陸士50期）が祭文を奏上された。

「小泉前総理が、退任直前の昨年8月15日に靖國神社参拝の公約を果たして、兎にも角にも16年の長きにわたって中断していた総理の参拝が復活したことに、大きな意義を認めるとともに、次期総理により更にこれが定着し、陛下の御親拝への道を開くものと確信していたところ、昨年7月の「富田メモ」なる新聞報道、依然として根強い中国による不当な内政干渉、これらに迎合する国内外の勢力の存在等誠に遺憾の極みである。このような状況の中で、「戦後レジームからの脱却」「美しい国日本」を目指す安倍内閣が誕生したが、安倍総理の掲げるこれらの目的達成のためには、戦後60余年を経過してなお、戦後の占領政策の影響を強く受け、その呪縛の中にいる我が国、我が国民を、速やかに真の日本人としての心に回帰させることが必要であり、その第一歩は、御英霊が一命をもって示された祖国日本への熱い思いに心を致し、行動することである。

安倍総理は、官房長官時代に、総理の靖國神社参拝を強く推進したにもかかわらず、今日まで「あいまい戦術」を取り続けている。先般の参議院議員選挙の大敗は、不幸にも色々な不祥事や不測の事態が重なったことなどにもよるが、その大きな要因の中に、総理就任前の総理とは違った姿を国民が敏感に感じ取ったからにほかならない。

今後政局が混迷し、国政の渋滞、民主党への妥協なども予想されるが、この中にあって少なくとも安倍総理は、その政治信条を曲げることなく、基本的な諸問題につき強力な指導力を発揮し、毅然として初心を貫き、その第一歩として、靖國神社への公式参拝を実現するよう期待し、願ってやまない。

一方、近年、靖國神社の参拝者は、逐次増加しており、昨年8月15日の参拝者は25万8千人にも上り、若年層も増えてきた。そして、若者達の中に、遊就館を参観して、我が国の正しい近現代史を探究しようとする姿勢が高まりつつある。

私共は本日、御英霊の大前に、これらの国民の声を受けながら更に心を合わせ、力を尽くして、総理等の公式参拝、そして御親拝を目指し、その国民運動を推進することを、改めて心からお誓い申し上げます。」と力強く奏上された。

続いて佛所護念会教団合唱部により

「海ゆかば・同期の桜・ふるさと」の3曲の献楽があって、一同順次本殿に進み、玉串奉奠をして閉式となった。

なお、拝殿中央には例年のように、千葉県茂原市にある「マリアの里カトリック日曜学校」の生徒達の折った千羽鶴が奉納されていたが、先に、この日曜学校の代表者塩崎深雪さんの父親が、日曜学校建築の際、屋根の十字架よりも高い日章旗の掲揚塔を建てるよう棟梁に頼んだこと、キリスト教徒である前に日本人であることを忘れるなと言われた話などを伺い、日本人の誇りを失っている今の人々に対する警声と受け止め、感銘深いものがあった。また、小泉前総理は、この日も早朝昇殿参拝を終えて、慰霊大祭前に退出された。

慰霊大祭を終えて、次の追悼中央国民集会に向かう。境内は次第に人波を増し、若い人々や子供連れ、外国人の姿も多く見受けられるようになった。記録的な猛暑にもかかわらず、参拝者は昨年を上回るのではなかろうか。

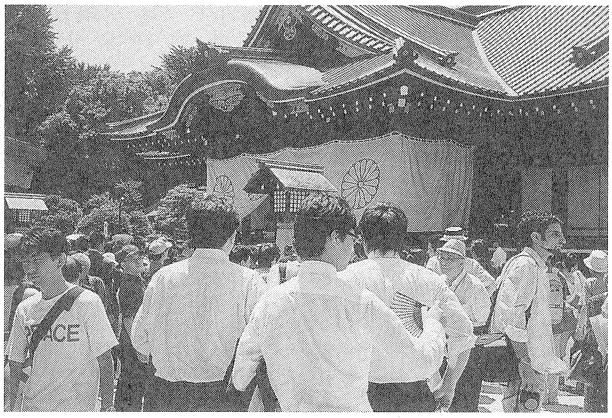
なお、この暑さの中で、靖國神社崇敬奉賛会青年部「あさなぎ」の若い会員による冷たい麦茶の接待は誠に有り難い。これまでは長年「英霊にこたえる会」の会員のご奉仕をいただいていたが、会員の高齢化に配慮し、次代を担う若者の心意気を示すものとして心温まる思いがした。

国民中央集会が開催される参道の大テントは既に超満員、周辺にも大勢の人々が、記録的な炎暑にもめげず立ち尽くし、熱心に集会を見守っていた。

集会は、定刻、国歌斉唱に始まり、靖國神社拝礼の後、終戦の詔書の玉音放送を拝聴し、あの日あの時の感慨を新たにした。主催者を代表して日本会議の三好達会長、英霊にこたえる会の堀江正夫会長がそれぞれ挨拶をされ、また、各界代表の提言として、台湾人留学生で、日本李登輝友の会青年部・副部長の薛格芳（せつかくほう）さんと亜細亜大学の東中野修道教授が、それぞれ講演をされた。

特に、日本会議の三好達会長は、挨拶の中で「先の大戦において勇戦奮闘して散華された勇士を始め、戦禍に殪れた多くの人々の本当の姿を語り継ぐべきことは、日本国民の責任であり、それ以上に大切なことは、英霊の慰霊と顕彰、そして、英霊によってお護り頂いた国民の感謝の誠を捧げることである。それは国家としても当然の義務である。「戦後レジームよりの脱却」「美しい国日本」を目指す安倍内閣によって教育の再生が図られ、教育基本法の改正が行われたが、内外情勢の厳しい変化により、政局の不安定、米国下院での慰安婦問題決議、南京事件関係映画の製作等憂慮すべき事態が生じているが、今こそ戦後60余年の偏向教育により失われた日本民族の誇りと矜持を取り戻して、この勝れた伝統と誇りのある日本の国家と国民のために、一命を捧げた英霊の御心を安んじるよう更に努力しなければならない。」と力強く述べられた。

また、台湾人留学生で、日本李登輝友の会青年部副部長の薛格芳（せつかくほう）さんは、今年5月30日～6月9日の間来日された、台湾の李登輝前総統ご夫妻の「奥の細道」探訪の旅に随行した際の感想や、李登輝先生が語った日本へのメッセージ（日本会議の月刊誌「日本の息吹」8月号掲載）に触れつつ、「日本人は、自国の素晴らしい文化や歴史、伝統を余りにも知らな過ぎるのではないか、もっと誇りと自信を持ってもらいたい。李登輝先生ご夫妻一行は、来日中の6月7日に靖國神社に昇殿参拝され、62年ぶりで同神社に英霊として祀られているお兄さんの御霊に会うことができたが、同様に靖國神社には、当時日本人であった台湾出身者二万七千余柱の英霊が祀られています。これ



らの英霊は、靖國神社で祀ってもらえなかったら、どこで祀ってもらえるのですか、台湾では祀ってもらうことはできません。戦後台湾人は、中国大陸からやって来た国民党政府の弾圧を受け、日本統治時代の教育、文化等を一掃しようとしましたが、今でも私たちの祖父母は、日本の統治時代を懐かしみ、日本の教育、文化の素晴らしさを語り、台湾の振興発展に尽くした日本人を尊敬しています。台湾と日本は、言わば運命共同体です。日本にとって台湾は、国防上、通商上色んな面で大事な国です。もっと多くの日本人に台湾の重要性を知ってもらい、指導と支援、協力をしてもらいたいのです。」と語り、日本人の奮起を促されたのには、いささか汗顔の思いであった。

正午、日本武道館で行われている政府主催の戦没者追悼式の中継に合わせて黙祷し、天皇陛下の御言葉を拝聴。終わって声明文を朗読し、海ゆかばを斉唱して閉会となった。

正午を過ぎて社頭へ向かう人波はますます増え、拝殿前には参拝者の長い列ができる有様。この分では参拝者の数は昨年の約25万8千名を上回るのではなかろうか。一人でも多くの人が参拝することによって国のために命を捧げられた英霊の御心が伝わることになる。社頭には英霊の遺書や遺詠が掲げられているが、多くの人々がその前に佇んでいる。戦争を知らない若い人の姿も多く見受けられる。

「あめつちのまことのみたまあつまりてやまと心となりにけらしも・・・英霊こそは、日本人の精神としての大和心を極めつくして散華されたのである。」これは、最高裁長官を退官後、昭和51年6月から昭和54年5月急逝されるまで、英霊にこたえる会の会長を務められた石田和外氏の会長就任挨拶の中での言葉である。氏は、昭和53年7月靖國神社第六代宮司に就任された松平永芳氏の相談を受け、法的には何ら問題ないことを明言されて、松平宮司が、長年の懸案であった、いわゆるA級戦犯とされて刑死を遂げた7名のほか未決拘禁中病死の2名、受刑中死亡の5名、計14名の殉難者の合祀を決断され、同年秋に合祀の儀を執り行うに当たって寄与された方である。

靖國神社の一番のもとは、国のために命を捧げられた霊魂を祀ることに尽きる。「もののふのかなしき命積み重ね積み重ね守る大和島根を」である。

靖國神社の本殿に祀られている霊璽簿記載の御祭神は、嘉永6年（一八五三年）の黒船来航以来二四六万六三七五柱であり、その中には女性五万七千余柱、当時日本人であった朝鮮・台湾出身者八万余柱（その中には李登輝前台湾総統の実兄も含まれている）も含まれている。また、本殿内の相殿には、内々陣へお遷しするまでの御霊（千鳥ケ淵戦没者墓苑のお骨を含む）が祀られているから、慰霊の対象となっており、神社には、戦死・戦病死した軍人・軍属（従軍看護婦・船員・報道員等）、準軍属（民間防空員・勤労動員学生・女子交換手等）、幕末の志士、法務死者（靖國神社では昭和殉難者）等の方々が祀られている。また、「元宮」（本殿に向かって左側回廊外側の二社殿のうち右側の御社）は、文久3年、幕末の志士の霊を祀るため、幕府にかくれて少数の有志により京都に建立された招魂社の元をなす小祠で、昭和6年の奉納鎮座。「鎮霊社」（昭和47年創建）には、国内戦で賊軍となった方々（西郷隆盛他）並びに全民間の戦禍犠牲者の御霊と共に、国籍を問わず万国（米・英・仏・支他）の戦死者・戦禍犠牲者の霊が祀られている。この二社は、宮司はじめ神社職員により、毎日お勤め

が行われている。したがって、戦没者墓苑にお預かりしている「御遺骨」も、将来にわたって収集の術のない空中散華者や海底深く横たわる「御遺骨」も、また、それぞれの墳墓に眠る「御遺骨」も、全てその御霊は靖國神社に祀られている。このことからも靖國神社が、幕末以来の全ての国の、全ての戦没者を慰霊する唯一の施設であることを銘記しなければならない。

靖國神社には、四季折々にいろいろの顔がある。新年の初詣の初々しく華やいだ顔。春の桜まつりや例大祭、桜は靖國の象徴でもある。さくらという言葉自体にも神聖な響きがある。さは神、くらは座、つまり神聖な神宿る木という意味がある。正に、靖國の桜は英霊の宿り給う依り代である。その桜を慕って老若男女数多の人々が賑やかに集い来たる。7月は「みたま祭り」の賑わい。万灯に飾られ、様々の思いを込めた絵灯籠、ねぶたなどが英霊を慰める。8月は終戦記念の慰霊大祭が厳粛に執り行われる。10月は秋の例大祭、菊花薫る中、様々の奉納芸能、催事に賑わう。これほど国民に慕われ、崇敬されるお社が他にあるだろうか。靖國神社こそが日本人の心の拠り所でなければならない。

今、何を語ら

表題は、当協議会の参加団体である「特定非営利活動法人ジェイワイエムエイ」（英文表記「Japan Youth Memorial Association」略称「ＮＰＯＪＹＭＡ」）の年次活動報告書の題名であるが、同法人では、この程、平成18年度の活動（派遣）報告書を発刊した。その発刊の辞の中で、学生代表（国士館大学）の村山かおりさんは、「今、こうして私達が平穏に暮らせているのは、先の大戦で祖国の為に戦われた方々、戦後日本の復興にご尽力された方々の血と涙の賜物であると切に感じております。私達のような若者が未来を生きていくためにも、「過去」を振り返り、正しい歴史を学び、先人達への感謝の気持ちを忘れず、後世に語り継がなければならないと思っております。本年度も、私達ジェイワイエムエイは、先人の方々の恩恵を忘れず、人を思いやる心を常に持ち、遺骨収集及び国際協力事業を通し、英霊への慰霊顕彰事業を執行部をはじめ青年一同精進する所存であります。」と明言しておられる。誠に頼もしく、美しい国・日本の未来を託すに足る、志ある青年達の集まりである。なお、右の報告書とは別に、同法人事務局長（国士館大学）の橋本真澄さんから、次のような報告文と遺骨収集派遣隊員達の感想記が、当協議会宛に送られてきた。

「私どもは、昭和42年、学生慰霊団として発足、戦争の傷跡の残る外地に赴き、日本軍玉砕地における慰霊活動を実施していた際、草むす屍同然に遺骨が放置されている現状を憂い、学生遺骨収集団を結成し、その後日本青年遺骨収集団と改称、学生を中心とした非営利団体として活動して参り、平成14年10月、特定非営利活動法人ジェイワイエムエイ（旧日本青年遺骨収集団）として東京都より認証されました。

これまで２３６次にわたり、延べ１３００余名の青年・学生層を先の大戦の激戦地に送り出し、約14万柱の御遺骨を祖国にお迎え致しました。

平成18年度は、延べ30名の青年・学生層を大東亜戦争の激戦地、強制抑留地などに送り出し、8地域に10次の派遣を実施、３８２柱の御遺骨を祖国にお迎えすることが出来ました。

私どもは、遺骨の収集活動並びに慰霊巡拝、慰霊碑の建設等と並び、創団時より活動の骨子に宣揚している「諸外国との親善活動」を強化・拡大して、かつてアジア共栄の理想を打ち立てた先人達の意を汲み取り、従来の遺骨収集事業を縦糸に、国際ボランティア事業を横糸にし、御英霊への慰霊・顕彰活動と、アジア・オセアニア地域の民生向上と友好事業、環境保全事業を推進していくつもりであり、今後は行政のフットワークでは出来ない仕事や、利潤追求を原則とする企業活動には及ばない事業を手掛けていきたいと考えております。」

伝承

第２３５次沖縄派遣
拓殖大学４年　石垣　拓真

私が参加した沖縄での遺骨収集は、今回が2回目である。去年は、遺骨収集自体が初参加であったため、取りあえず、先輩に言われたことや、周りを見て、ただひたすら作業を行ったことを覚えている。今回は2度目であるだけに、また、最上級生として、後輩に対し何ができるかと考えた時、それは伝えるということだ、と思った。

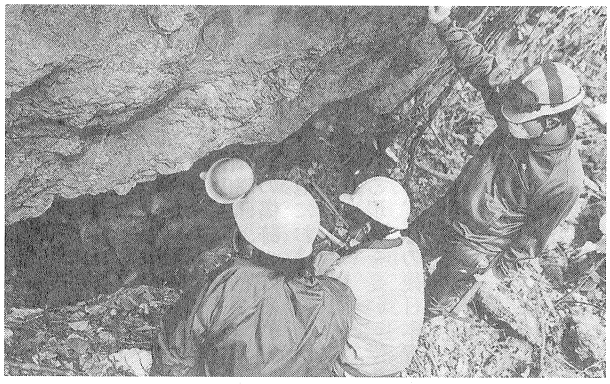
沖縄戦のことは、恥ずかしながら、この団体に入って初めて知った。むしろ私は、「戦争」という言葉を避けてきた。しかし、「戦争」、特に沖縄戦は、

忘れてはならない、日本での唯一の地上戦である。民間人をも巻き込んだ悲惨な戦いは、一般の日本人のみならず、現地沖縄の若い世代の人すら、忘れかけている。いや、知りもしない現実に驚かされた。戦争というのは、今、風化してきているのである。今回、沖縄の高校で講義をしてきた。そこで、沖縄の学生に沖縄戦について聞いても、口を開こうとしない。中には、余りに身近で悲惨過ぎるため、言いたくない学生もいたが、大半は知りもしなかった。どの学生も、戦跡は単なる心霊スポットとしてしか取り上げてなく、壕もゴミ捨て場的な扱いだったのには胸が痛んだ。

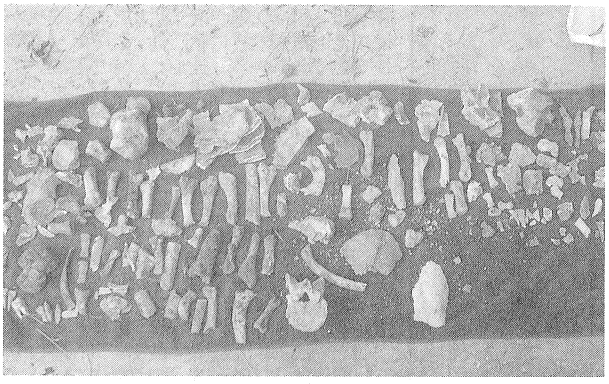
今回は、国吉勇氏の御指導の下、遺骨収集を行った。作業をしながら国吉氏とお話しして、色んなことを教わった。国吉氏は、１日に１食しか摂らないという。昼食休憩を取ろうとしたら「そんなんで遺骨が出てくると思ってんの」と言われた。私達は遺骨を収集しに来ているわけだが、国吉氏は、遺骨を収集するだけでなく、作業衣を着て現場に立ったら、常に当時の生活を思い出し、当時の人達と同じ気持ちで作業をしていた。国吉氏は、当時６歳だったと言っていた。お父さんの顔も知らないし、お母さんの顔も知らない、と言っていた。物心付く前の出来事だったため、どこにどんな壕があるかも、初めは分からなかったらしい。しかし、今では沖縄を代表する遺骨収集の第一人者だ。「どうして分かるんですか？」と聞いたところ、「地形が変わっても隠れる所は皆一緒よ！当時の生活を想像すれば、それぐらい直ぐ分かるさ」と言っていた。国吉氏の遺骨収集に対する想いは計り知れない。今の私には、当時隠れていた場所なんて想像もできない。御遺骨を見付けられなくて焦る隊員がいた時、国吉氏が言った言葉は今でも心に響いている。「遺骨が見付けられなくても、この場にいることに意味があるのさ、遺骨だけじゃなく、戦争で亡くなった人達の『想い』を探すことも大事なのさ」、この言葉は一生忘れない。それ以降、御遺骨を発見して手に取った時には、必ず御遺骨に対して話し掛けるようにした。また、どうしてここで眠っているのか？家族は？親戚は？などとそれぞれの御遺骨に対して話し掛けることによって、まだ眠っている御遺骨の場所を教えてくれたような気もした。

沖縄は、壕が崩れて亡くなった方や自決した方が多いため、ほとんどがばらばらで、残骨としてしか見付からない。その残骨をモノとして見るのか、ヒトとして見るのか、それも国吉氏に教わった。遺骨収集を50年もやっている国吉氏には、遺骨収集を通じて様々なことを教わった。その50年に及ぶキャリアの言葉には重みがあり、幾つもの言葉や行動が胸に焼き付いた。１日も早く全ての御遺骨をお迎えすることが今の私達にできる最大限の願いである。そのためにも、この貴重な体験ができたことを、必ずや後世に伝えていかなければならない。戦争を体験した方々の話を聞けるのは、私達が最後の世代である。そのためにも、遺骨収集事業というものを、一人でも多くの人に知ってもらえるよう、私達は、今回沖縄で学んだことを有りのままに伝えていく必要がある。

最後になりましたが、この活動に協力してくださった全ての方々に心より感謝するとともに、これからもこの活動を絶やさず伝えていくことをお約束いたします。



洞窟の中での作業（沖縄）



収集できた御遺骨（沖縄）

硫黄島の哭声

第２３６次硫黄島派遣
早稲田大学３年　宮崎　貴裕

平成19年度第3次硫黄島遺骨収集政府派遣に参加し、実際に硫黄島の地を踏み、自分の肌で感じ、頭で考えたことを述べたい。

決して乗り心地の良いとは言えない輸送機に乗り込み空輸されること約3時間、一般の参加者の腰がそろそろ痛くなってきた頃、遺骨収集に同行された自衛隊員の皆さんは涼しい顔をしているのを見るにつけ、日頃の自衛隊の鍛錬に頭が下がる思いを感じた。そんなふうに考えている間に、大東亜戦争の激戦地の一つである、硫黄島に降り立つことができた。

航空自衛隊の基地に立ち、ぐるりと周りを眺めたが、この島が激戦地だったとは、一見しただけでは分からない。だが、この島には今も帰りを待ち侘びる御遺骨が1万柱以上眠っておられるのである。

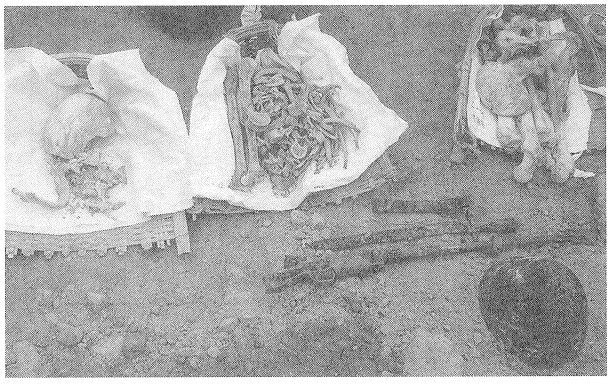
戦後60余年を経てなお、帰還できない御遺骨があるという事実を、「英霊にこたえる会」作製によるビデオで知った時から、私は居ても立ってもおれなくなった。その理由を言語化するのは難しい。他人に説明するつもりでそう感じ入ったわけではないからだ。強いて言うならば、愛する人や地域のため、そして、それらを包括する概念である祖国や天皇陛下のために戦ってくださったのに、その祖国は彼らに対し余りにも無情な扱いをしてきた。そのことに対する罪悪感であり、祖国の英雄に対する感謝の念であろう。

派遣期間中は、全てが研学の場であり、貴重な体験の連続であったことは言うまでもない。しかし、特に心を揺り動かされた場面が三つある。一つ目は、後発部隊に属した私が、先発部隊が収集した御遺骨に初めて手を合わせた場面である。遺骨収集に関わるボランティアに参加していたとはいえ、それまではどこか観念的な理解でしかなかった「御遺骨」という概念が、実感を伴った理解として、心裡に現じたのだ。二つ目は、地熱蒸し、土埃舞う壕内に入り、実際に御遺骨を手に収めた場面である。60余年も顧みることもなく、壕内に放置してきたことへの悔恨の念が胸を襲ったのである。最後に、遺骨収集団から厚生労働省への御遺骨引渡し式の場面である。千鳥ケ淵戦没者墓苑で行われた式典には、御遺族達の団体も参列しており、その方々からも労いの言葉と共に感謝の言葉も頂いた。戦時中から戦後の混乱期を生き抜いてこられた人生の先輩達が、何も知らない私にまでそのような言葉を掛けてくださるのは、本当に有り難いことだと思った。

これらの体験から、英霊への感謝や先人への畏敬の念を実体験として感得することができた。現代の日本の物質的繁栄は、彼らが命を賭して戦ったからこそ達成可能であったのである。兵士について調べれば調べるほど、精神的腐敗の進んだ現代日本人とは比べ物にならないくらいの高潔さを持っている。彼らは正に英でた霊なのである。

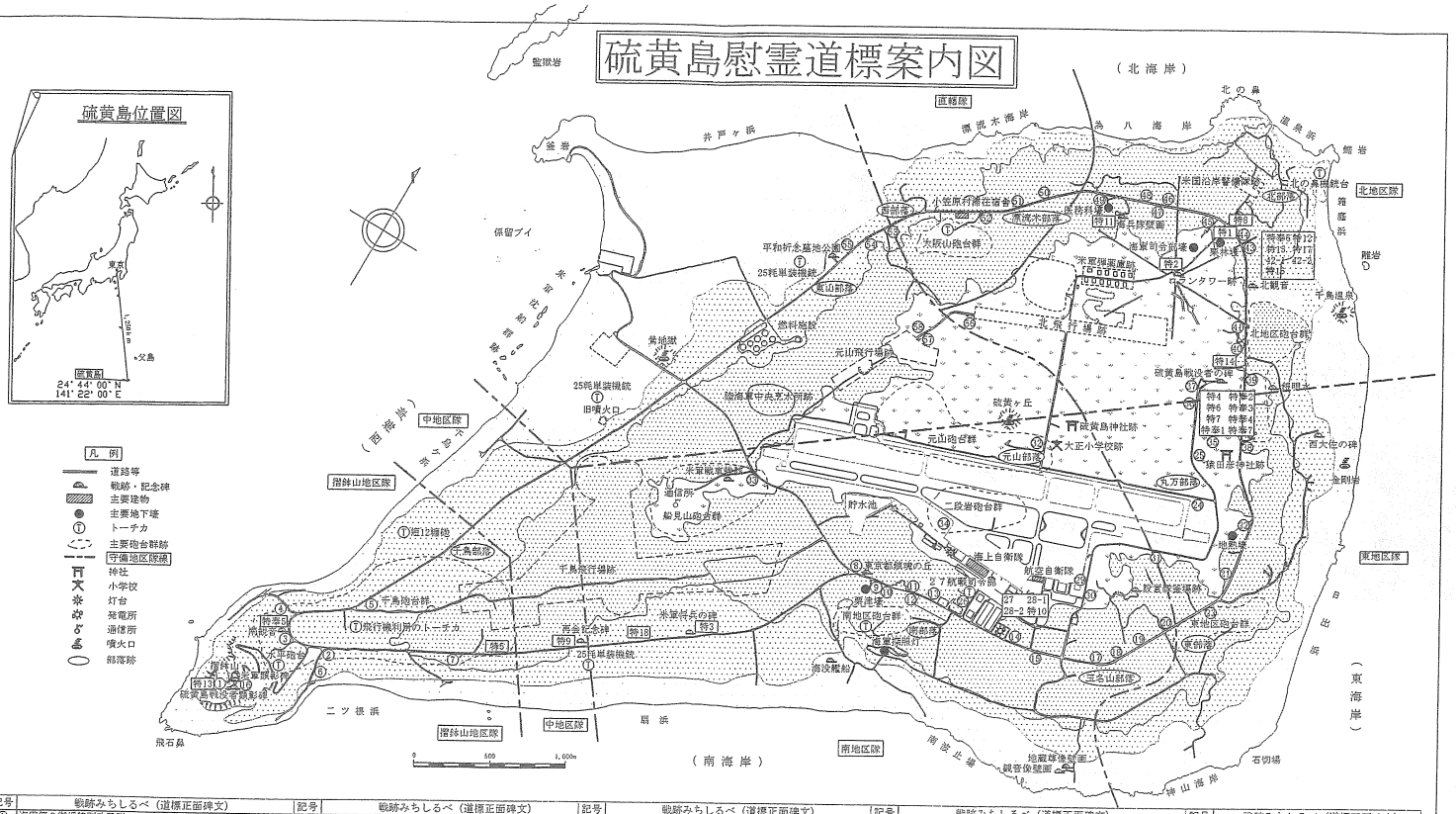
近年の言論に支配的な、兵士は犠牲者だとする邪辞を廃し、大東亜戦争やその他全ての戦争において、戦士は国難に殉じた英雄であることを肝に銘じて活動を行いたい。また、「最後の一片まで」の精神で、今後の遺骨収集を続けていきたいと思う。

洞窟の中での作業（硫黄島）



収集できた御遺骨（硫黄島）

硫黄島慰霊道標案内図



記号	戦跡みちしるべ（道標正面碑文）	記号	戦跡みちしるべ（道標正面碑文）	記号	戦跡みちしるべ（道標正面碑文）	記号	戦跡みちしるべ（道標正面碑文）	記号	戦跡みちしるべ（道標正面碑文）
①	陸軍第２御楯特別攻撃隊	⑮	陸軍混成第２旅団野戦病院壕群	㊹	海軍硫黄島警備隊二段岩砲台群	㊿	陸軍第１０９師団歩兵第１４５聯隊本部壕群	特Ｔ	日米胃癌記念碑
②	陸軍混成第２旅団独立運射砲第１０大隊壕	⑯	陸軍混成第２旅団工兵隊第１中隊壕群	㊺	陸軍混成第２旅団独立歩兵第３１４大隊壕群	(51)	陸軍第１０９師団歩兵第１４５聯隊第２大隊壕群	特11	千田ヶ丘　陸軍混成第２旅団司令部壕
③	陸軍硫黄島警備隊千鳥砲台群掩蔽山１４糎平射砲台	⑰	陸軍混成第２旅団独立運射砲第１１大隊壕群	㊻	陸軍混成第２旅団独立混成第１７聯隊第３大隊戦闘地域	(52)	海軍硫黄島警備隊大原山砲台群１５糎平射砲台	特12	壁面由来の碑
④	陸軍混成第２旅団独立歩兵第３１２大隊壕	⑱	陸軍混成第２旅団独立白砲第２０大隊本部壕	㊼	陸軍混成第二旅団独立機関銃第一大隊第二中隊戦闘地域	(53)	陸軍混成第２旅団中迫撃砲第２大隊主力陣地壕	特13	軟魂碑
⑤	海軍硫黄島警備隊千鳥砲台群	⑲	陸軍第１０９師団歩兵第１４５聯隊第３大隊壕群	㊽	陸軍第１０９師団独立迫撃砲第１中隊壕	(54)	陸軍混成第２旅団独立歩兵第３１１大隊第１、第２、第３中隊壕	特14	日米硫黄島戦没者顕彰碑副碑
⑥	陸軍混成第２旅団工兵第１中隊第１小隊戦闘地域	⑳	海軍硫黄島警備隊東地区砲台群	㊾	海軍硫黄島警備隊北地区砲台群	(55)	陸軍混成第２旅団砲兵隊第３中隊陣地及び壕	特15	海軍硫黄島警備隊本部壕
⑦	陸軍第１０９師団歩兵第１４５聯隊第１大隊第２中隊戦闘地域	㉑	陸軍第１０９師団警戒隊戦闘地域	㊿	海軍硫黄島警備隊壕	(56)	陸軍混成第２旅団独立歩兵第３１０大隊第１中隊陣地壕	特16	愛馬の碑
⑧	陸軍南地区戦闘指揮所	㉒	陸軍混成第２旅団歩兵第１４５聯隊砲兵大隊第１中隊陣地	(51)	陸軍第１０９師団歩兵第１４５聯隊第１大隊壕	(57)	陸軍第１０９師団歩兵第１４５聯隊第１大隊主力戦闘地域	特17	海軍硫黄島警備隊北硫黄島派遣隊（鎮魂の碑）
⑨	海軍硫黄島警備隊南地区砲台群	㉓	海軍第１御楯特別攻撃隊出撃前夜の会議室	(52)	陸軍混成第２旅団第１７聯隊第３大隊壕群	(58)	陸軍混成第２旅団独立機関銃第１大隊壕群	特18	平和祈念の碑
⑩	陸軍混成第２旅団独立歩兵第３０９大隊壕群	㉔	陸軍混成第２旅団司令部壕	(53)	陸軍混成第２旅団独立歩兵第３１４大隊第３中隊戦闘地域	(59)	陸軍小笠原兵団第１０９師団司令部壕	特19	米国海軍第４海兵師団墓地跡の碑
⑪	海軍第２０４設営隊揚陸作業隊壕	(54-1)	陸軍混成第２旅団砲兵団	(54)	陸軍第２７航空戦隊司令部壕	(60)	海軍第２７航空戦隊司令部壕	特20	香炉
⑫	陸軍混成第２旅団独立運射砲第１２大隊陣地	(54-2)	陸軍混成第２旅団摺鉢下東部第８５師団野戦作井第２１中隊	(55)	陸軍混成第２旅団司令部及び中迫撃砲第３大隊金城の地	(61)	海防艦船の碑	特21	平霊碑
⑬	陸軍混成第２旅団独立運射砲第８大隊壕群	(56)	海軍南方諸島航空隊本部壕	(56)	陸軍第１０９師団副官部及び軍医官部壕	(62)	海軍学徒出身戦没士官の碑	特22	灯竜
⑭	陸軍混成第２旅団独立運射砲第１２大隊壕群	(57)	海軍第２０４設営隊壕群	(57)	陸軍第１０９師団歩兵第１４５聯隊工兵中隊殺出撃壕	(63)	海軍硫黄島警備隊千鳥砲台群高砂機銃砲台	特23	五重之塔
⑮	陸軍混成第２旅団中迫撃砲第３大隊壕群	(58)	陸軍第１０９師団戦車第２６聯隊	(58)	陸軍混成第２旅団歩兵第１４５聯隊砲兵大隊第２中隊陣地壕	(64)	陸軍混成第２旅団第第８５師団野戦作井第２１中隊之碑	特24	南観音
⑯	海軍第１御楯特別攻撃隊	(59)	海軍硫黄島警備隊元山砲台群	(59)	陸軍第１０９師団歩兵第１４５聯隊衛生隊壕群	(65)	為　安寧　海軍軍属供養塔	特25	北観音　マリア観音
⑰	陸軍混成第２旅団独立白砲第２０大隊第１中隊壕群	(60)	海軍硫黄島警備隊船見山砲台群	(60)	陸軍第１０９師団通信班大木営苑発信所	(66)	米国海軍沿岸警備隊	特26	観音堂安堂並びに供花台

協議会参加団体の紹介

⑥財団法人　海原会

【団体の沿革・目的】

財団法人海原会は、予科練（海軍飛行予科練習生）出身戦没者の慰霊顕彰を通じ、再び戦争の惨禍を繰り返すことのないよう、全人類の平和を願い、我が国の繁栄に寄与することを基本理念として、昭和53年に設立された厚生労働省所管の認可団体である。構成員は、甲種飛行予科練習生出身者で構成する全国甲飛会とその会員、乙種飛行予科練習生出身者で構成する雄飛会とその会員、乙種特別飛行予科練習生出身者で構成する特飛会とその会員及び丙種飛行予科練習生出身者で構成する丙飛会とその会員、遺族、一般等で、予科練同窓生の総合団体であるが、会員の老齢化が進み、物故者が出るなどして、会員数は、年々減少の傾向にあり、現在約3000人となっている。

予科練は、創設以来終戦までに25万名余の練習生が入隊したものの、その1割近い練習生が卒業し、終戦時の在隊者は、22万余名であった。卒業生の7割近くが戦没されたが、戦没者の4割は特攻兵として、空に海に、祖国愛と家族愛に燃えて、純粋その儘の無垢の精神で散華された。その御霊は、1万8540余柱に及ぶ。その御霊の慰霊顕彰のための慰霊祭の執行、英霊が残された数々の遺品・遺稿・遺詠・遺書等の品々を納める記念館、慰霊碑等の保存管理、及びそれらを後世に継承し、並びに予科練出身同窓の親睦互助を図ることが本会設立の主要目的であり、使命であるが、本年は、海原会創立30周年、土浦雄翔園内二人像建立・慰霊祭執行40年の節目の年に当たり、去る6月10日、浅草ビューホテルにおいて、これらの記念すべき式典を挙行した。

【団体の主要事業】

1　慰霊顕彰事業

先の大戦において、祖国の危急を救うため、我が国航空戦力の主軸となって、一身を国に捧げた予科練戦没者の慰霊顕彰は、本会の主要事業であり、毎年秋には、土浦の陸上自衛隊武器学校内にある雄翔園の慰霊碑二人像前において、本会主催の慰霊祭を執行している。本年は、11月11日、同所において、第40回予科練戦没者慰霊祭を執行する予定である。

予科練戦没者の遺書・遺品・遺稿・遺詠等を収集展示する記念館・雄翔館を慰霊碑と共に雄翔園内に建立し、武器学校の支援の下に、その維持管理の業務に当たっているが、一般参観者数は年間10万人以上に及んでいる。

2　定期刊行物発行事業

本会の機関紙・月刊「豫科練」は、発行以来既に370号を超え、会員、遺族及び関係諸団体、並びに社会一般の人々の関心と高い評価を得ているが、今後とも一層内容の充実を図り、本会の健全な運営に資するよう努力している。

3　遺族支援調査事業

予科練戦没者遺族の動向は、歳月の経過に伴い著しく変化しているが、その所在と安否を調査し、遺族を慰霊祭並びに各種催しに招待して、激励と支援を行っている。

4　資料収集整理事業

予科練戦没者の慰霊顕彰事業と関連して、戦没者の遺書・遺品・実戦記録を収集するとともに、予科練生存者・遺族及び海軍出身者等の体験記などを収集して、予科練の事業を次の世代へ正しく伝承するよう努力している。

5　青少年育成支援事業

青少年の健全なる育成に寄与するため、会員より候補団体を募り、理事会に図って支援を行うものである。

【組織の概要】

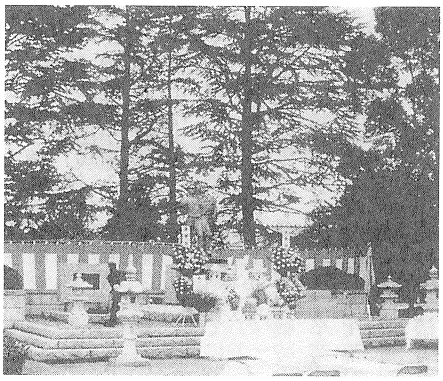
（氏名等は平成19年5月19日現在）

会　　長　櫻井　房一
副 会 長　永瀬　嘉三　杉田　貞雄
専務理事兼事務局長　羽田　俊一
理　　事　山崎　久雄　荒川　尚
　　渋井　武男　堺　周一
　　藤野　雅之　穴山　正司
　　今泉　利光　安井　剛
　　阿保　文敏　菅野　寛也
監　　事　平野陽一郎　益満　正人　細川千代治
　　佐藤　健次
雄翔館館長　畠山昭一郎
名誉会長　前田　武
顧　　問　吉野　治男　小鍛治敏雄
　　村山　正男　横溝　潔
　　伊藤　進　泉山　裕
　　松田　政雄　住友　勝一
　　大原　亮治
参　　与　吉田　次郎　加藤　亀雄
　　長沼　武治　坂場　儀弘
評 議 員　甲飛会　25名
　　雄飛会　23名
　　特飛会　4名
　　丙飛会　6名　合計58名

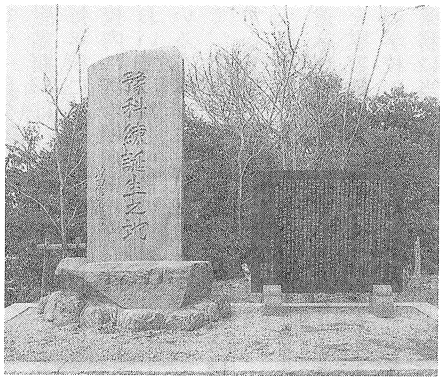
【事務局】

〒140－0013
東京都品川区南大井6－16－12
（大森コーポビアネーズ）
電　話　03－3768－3351
FAX　03－3768－3352
郵便振込口座名義
「財団法人海原会事務局」
口座番号
「00140－9－54332」

予科練の誕生と変遷の概要



「二人像」碑前豫科練戦没者慰霊祭



「豫科練誕生之地」の碑

◎『『豫科練誕生之地』の碑」

（以下「甲飛だより」第81号より）

昭和５年の「ロンドン」条約の結果、軍備制限外の航空軍備を拡充することとなり、新しい搭乗員拡充の採用源として、少年時代から確りした基礎教育を行い、優秀な初級士官搭乗員を養成する方針が決まり、少年航空兵制度が登場した。

全国の志願者６千余名の中から74倍という難関を突破して79名が合格、昭和５年６月１日、横須賀海軍航空隊に入隊、新設の予科練習部の教官、教員によって教育を開始した。

昭和11年末「航空科」が「飛行科」と改正されたとき、「海軍予科練習生」は「海軍飛行予科練習生」と改称された。

昭和12年から無条約時代に突入するため、航空軍備の大拡充が行われることになり、従来の予科練習生制度では量的、時間的に間に合わない見込みとなったため、中学校４学年１学期修了程度の者を採用し、より短期的に尉官代用搭乗員を養成する制度が採用され、昭和12年９月１日にその第１期生が、横須賀海軍航空隊に入隊して教育を開始した。

この新制度の採用により、従来の予科練習生を「乙種」とし、新制度の予科練習生を「甲種」とした。

新制度の発足と将来の見通しから、これまでの施設では狭隘になるため、昭和14年３月１日に霞ケ浦海軍航空隊に移転した。

かくして、期を追い大量採用となり、三重、鹿児島に次いで昭和20年までに、19の予科練教育専門の練習航空隊を設けた。

予科練習生の歴史15年３カ月のうち８年９カ月は、この横須賀追浜の地で教育が行われ、ここに入隊した期は、乙種が第１期から第10期まで、甲種が第１期から第３期までで、霞ケ浦空に移転したのは、乙８期、９期、10期、甲２期、３期であった。

予科練教育を受けて巣立った若鷲達は、日中戦争から太平洋戦争にかけて海軍航空隊の基幹搭乗員として奮戦し、蕾の花の生涯を祖国安泰のために捧げた。

戦後、生き残った予科練出身者によって、若人達の至純の赤心を顕彰し、祖国の安寧と世界平和を祈念して、少年時代の学び舎の丘にこの碑を建立した。

○所在地　横須賀市貝塚緑地丘上

○建立年月日　昭和56年６月１日

◎海軍航空隊

海軍航空隊の発祥は、大正５年４月１日に水偵１隊、水練１／３隊で開隊した横須賀海軍航空隊が始まりである。次いで、大正11年11月１日に開隊した霞ケ浦海軍航空隊は、搭乗員教育の中心的役割を果たした。更に、日中戦争までに、大村、木更津、鹿屋、横浜など13航空隊が開隊した。

第３次補充計画で航空兵力の増強が図られ、太平洋戦争開戦までに高雄、鈴鹿、筑波、大分、土浦など18航空隊が開隊し、合計31航空隊となった。

開戦後は、要員の大量養成の必要から各地に次々と開隊し、その数は実に85航空隊が開隊した。

このほか特設海軍航空隊という実施航空隊は17航空隊があり、開戦後は、１０６航空隊が編成され、すべて番号航空隊名で、昭和17年11月１日から３桁数字となり、頭の数字で機種が分かるように命名された。例えば、７６２空といえば陸攻隊、２０１空、３４３空といえば戦闘機隊、８００番が飛行艇というように命名された。

海軍航空隊で地名の航空隊は大体において各教程別の練習航空隊で、基礎教程（土浦空、三重空、鹿児島空）、中練教程、実用機教程、錬成航空隊、実施航空隊とに分けられていた。

◎海軍航空殉難者慰霊塔の由来

霞ケ浦海軍航空隊は、海軍航空隊として２番目に開隊した航空隊で、センビル教官の指導を受けて以来の飛行学生、練習生（操縦、偵練、予科練）は、搭乗員として最初の教程をこの地でス

タートを切った。

海軍航空の中枢の地であり、この慰霊塔は、我が国海軍がはじめて航空技術の訓練を始めた、大正5年以降、昭和20年終戦までの全日本国海軍航空隊員中、訓練等で殉職された方々の御霊5千573柱が祀られております。

当時、我が海軍航空が世界に劣らぬ発展を遂げられたのは、これら御霊の力大なるものであることを思い、これらの御霊を慰霊申し上げ、我が国の平和と発展を願うため、大正14年当時、霞ケ浦海軍航空隊に霞ケ浦神社が建立され、春秋の慰霊祭が行われておりましたが、終戦時、これらを撤去の止むなき状態に至り、その後昭和30年、現在地に有志の寄付金を以て、本部横から飛行場に向かう道路末端の一隅に、霞ケ浦神社社碑と慰霊塔を建立し、ここに御霊は永久に安らかに鎮まることとなったものです。

年々関係者によって慰霊祭が碑前で行われています。

霞ケ浦神社碑

慰霊塔

○所在地　茨城県稲敷郡阿見町
○建立年月日　昭和30年12月17日
○慰霊祭　毎年4月の第2日曜日

巨星墜つ
瀬島龍三会長逝去

当協議会会長瀬島龍三氏が、去る9月4日早暁、御自宅において御逝去になられた。享年95歳。

瀬島氏は、戦後の長い年月の経過の中で、戦没者慰霊の心が風化するのを憂え、慰霊事業の永続を希って当大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会の設立を企画された。平成17年7月の当協議会創設以降は、自ら会長として陣頭に立たれ、戦没者慰霊事業の充実継続に尽瘁された。その矢先、僅か2年にしての御他界は、今後の末永い御指導を期待していた役員一同、正に断腸の思いである。今はただ、心から会長の御冥福をお祈り申し上げる。

瀬島会長が戦没者慰霊に執念を燃やされたのは、11年間のシベリア抑留の体験にある。収容所での日々、劣悪な環境と過酷な強制労働の中で、次々と世を去る犠牲者を目の当たりにして、この人達の慰霊をこそ、自分の終生の事業にしようと決意されたことを、折に触れて伺ったことがある。

シベリア抑留から帰国され、昭和33年の伊藤忠商事(株)入社以降の商社マン、財界人、後には、政界の指南役としての御活躍は、山崎豊子氏の小説のモデルにもなったほどに伝説的ではあるが、その華やかな御活躍の傍ら、昭和40年代以降は、戦没者慰霊事業に関する地道な活動に、瀬島氏ならではの力量を発揮して獅子奮迅の活躍をされた。特に、当時の南太平洋戦没者慰霊協会会長竹田元宮殿下を補佐して、南方各地やシベリアでの海外慰霊碑建設のための影の力となってのお力尽くしと成果は、忘れることができない。

私どもの身近なところでは、昭和62年からは(財)千鳥ケ淵戦没者墓苑奉仕会会長、平成4年からは(財)太平洋戦没者慰霊協会会長、同じく(財)特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会会長、平成17年からは(財)大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会会長をお務めいただき、親しくご指導をいただいたことを感謝申し上げるものである。私どもが道標とも頼り、羅針盤とも頼む巨星瀬島龍三氏を失ったことは痛恨の極みであるが、今はただ、亡き瀬島会長の御意志を体し、残された我々一同、思いも新たに、戦没者慰霊顕彰事業の継承と永続のために全力を傾注することを墓前にお誓い申し上げるものである。

合掌

(協議会理事長　柚木　文夫記)

事務局からの報告

○平成19年度「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」の催行

去る7月7日(土)正午より、靖國神社において、当協議会が、協議会参加諸団体と共に催行した、平成19年度「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」は、天候にも恵まれ、多くの会員の皆様のご参加並びにご支援・ご協力を得て、無事終了することができました。心より厚く感謝申し上げます。当日は、当協議会の名誉総裁であられる三笠宮崇仁親王殿下のご臨席を賜り、佐久間一水交会会長、齋須重一偕行社副会長、杉山蕃新生つばさ会会長を始め多くの来賓、各団体代表の方々にもご参加い

ただき、盛会裡に式典及び直会を催行することができました。式典参列者は１７９名、直会参加者は１２４名を数えました。

また、昨年に引き続き、世田谷区民吹奏楽団、世田谷コールエーデ合唱団のご奉仕、ご協力をいただきました。

なお、来年度の全戦没者合同慰霊祭は、**平成20年7月5日（土）**に催行の予定です。

多くの皆様のご参加をお願い申し上げます。

○参加団体幹事会の開催　平成19年7月20日（金）、当協議会は第3回参加団体幹事会を開催し、本年度の合同慰霊祭の反省と来年度の合同慰霊祭の在り方等について、意見を交換した。

（会議参加団体）

英霊にこたえる会・太平洋戦争戦没者慰霊協会・千鳥ケ淵戦没者墓苑奉仕会・特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会

◇　◇

新入会員及び寄付者

（6月1日～8月31日）

【賛助会員】（あいうえお順）

池田啓祐　池本佳世
井出洋大島輝之助
大橋政夫　菅博敏
木家勝　棚澤宏樹
小西正徳　近藤一郎
櫻井修五　篠崎弘
定栄洲弘　関口待
高野武司　谷川孝司
友枝哲夫　中山千之
長沼武治　鳴神長和
野本眞二　星野久
前川昌三　前原輝男
水澤博　向井彬
安岡幸吉　山口重輝
吉田知弘　渡辺勉

【寄付者】

谷川孝司

◇　◇

本年度会費納入のお願い

当協議会は、毎年10月に当該年度の会費納入のお願いを、会員の皆様宛てに差し上げております。

会員の皆様には、本年度も年会費の納入をお願いいたしたく、今回の会報「慰霊」第7号の発送に合わせて、払込用紙を同封させていただきました。

よろしくお願い申し上げます。

大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会ご入会のご案内

当協議会の趣旨にご理解を賜り、戦没者慰霊事業の永続のため、多くの方々のご入会をお待ちしております。

当協議会設立の趣旨

過ぐる大東亜戦争においては、多くの方々が戦いに身を投じ、国を思い民族の幸せを希いつつ、戦火に斃れられました。その数三百十万余人に及んでおります。今日、私どもが享受する平和と繁栄は、これら戦没者の尊い犠牲の上に築かれたものであります。

しかしながら、戦後六十余年の歳月が経過し、これら戦没者に対する慰霊の心が風化しつつあることが懸念されます。また、これまで戦没者慰霊の火を燃やし続けてこられた慰霊諸団体の多くが、会員の高齢化により、その活動の継続が危ぶまれております。

ここにおいて、それら慰霊諸団体の活動を継承し、慰霊事業を永続させ、次代に広めてゆくために、私どもは慰霊諸団体と相諮り、「大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会」を設立したものであります。

私どもは、慰霊諸団体と相携えて、戦没者慰霊顕彰事業に全力を尽くします。

当協議会の会員の区分と年会費は次のとおりです。

一　賛助会員（本会の趣旨に賛同する個人）
　年会費　三、〇〇〇円
二　賛助特別会員（特別ご芳志の賛助会員）
　年会費　五〇、〇〇〇円
三　正会員（本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人）
　年会費　一〇、〇〇〇円
四　特別会員（本会の趣旨に賛同する法人・団体）
　年会費　五〇、〇〇〇円

皆様のご理解とご協力を、心からお願い申し上げます。